

「落語と私」 その参拾壱

三代目 橘ノ百圓

9月号の原稿を書いています。今、毎日の感染者が1,000人を超えている驚くべき数字です。人的被害も大きいですし、経済への影響も計り知れません。只、我々に出来る事は、三密を避け、不要不急の外出を控える、これを守る！こんな時ですから、皆さん、大いに笑って免疫力を高めましょう。

「昭和の名人と現在の噺家」

今回は、チョイト大上段に振り被りました。只、私は昭和22年の生まれですから、戦前の名人は全く知りません。読者の中に、昭和10年代の名人をご存知の方が居らっしゃいましたら、是非、話を聞かせてください。そして、これは、あくまで私の主観で在り、皆様の中には、他にあの人も名人だろ、とか、エッ！あいつが名人!?テな方も居らっしゃるかも!?ですが、その話は又、個人的に承るとして筆を進めて行きたいと思います。では、先ず名人とは？広辞苑で調べてみました。

名人=技芸にすぐれて名のある人

名人芸=名人のみが成しとげる高度の技芸 と解説して在ります。そんな事も参考に、私の選んだ昭和の名人、4名を記します。

八代目 桂文楽(本名 ^{なみかわますよし}並河益義)明治25年11月3日生

明治41年頃初代 桂小南に入門 ^{このぶ}桂小庭-明治43年二ツ目 地方廻り-三遊亭圓都門人 小圓都-桂小庭-大正4、5年七代目 翁家さん馬(八代目文治)門人 さん生-大正6年9月真打 五代目左楽門人 翁家馬之助-大正9年5月八代目 桂文楽襲名。(並河の文楽、黒門町の師匠) 昭和46年12月12日歿(79才) 法名(戒名) 桂春院文楽益義居士

芸は、明るく端正で本格派、完璧主義、どの噺も、いつも同じ時間で収める事が出来るとの伝説まで残っている。只、八代目襲名には色々と問題が在った様で、本来ですと六代目ですが、語呂の良さと、八は末広がりとの理由から、後ろ楯の五代目左楽師匠の強引な推しが在ったと思われます。

“厄払い”の様な与太郎噺から“明烏”“酢豆腐”“船徳”などの若旦那の噺“愛宕山”“恪気の火の玉”“寝床”他大旦那が主人公、又“景清”“心眼”にみる心に深く残る噺など、芸幅は広いです。皆さんも耳にした事が在るかと思いますが、残念にも昭和46年8月31日国立小劇場、落語研究会におきまして「大仏餅」の口演中絶句を致しまして、あの「勉強しなおして参ります」の言葉を残し、その年の12月まで一度も高座に復帰する事なく息を引き取りました。合掌！



桂 文楽

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

五代目 古今亭志ん生 (本名 ^{みのべこうぞう} 美濃部孝蔵) 明治23年6月28日生
明治38年頃天狗連で盛朝を名乗った事も在る。とにかく、この人は
記録的な改名数で全て書き出しますと(亭号と年代は省く)

^{ちやうた} 朝太 - 圓菊 - 馬太郎 - 武生 - 馬きん - しん馬 - 一時講釈師 小金
井芦風 - しん馬 - 馬きん - 馬生 - 東三楼 - ぎん馬 - 甚語楼 - 馬石
- 甚語楼 - しん馬 - 馬生 - 昭和14年3月五代目 古今亭志ん生襲
名、何ンと17回の改名、これは当時の生活苦からと聞いています。
昭和48年9月21日歿(83才) 法名(戒名)松風院孝譽彩雲志ん生居
士

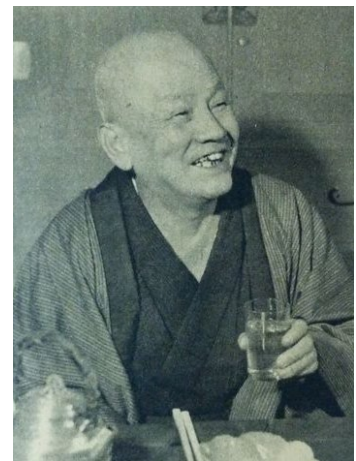
芸風は、八方破れ、^{ごうほうらいらく}豪放磊落、天衣無縫、ぞろっぺとの評が高い
のですが、皆さんが口を一にするのは「大変な努力家」だと言う事
です。若い頃から稽古を欠かした事が無いそうで、その裏打ちの上に、あの凄さが在るのだと思います。皆
さん意外と思われるでしょうが、志ん生自身が「嘶は理屈で説明が出来なくちゃ駄目だ！」そう言わしめ
ている訳ですから、前述の文楽師匠が楷書なら、志ん生師匠は楷書を極めた草書かも!? 大分昔になりますが、
当時の前座さん30人ほどに、自分の目指す嘶家は? 文楽型か志ん生型、この問いに、八割近い前座
さんが、志ん生師匠に手を挙げました。只、その時、文楽師匠の芸は努力すれば何ンとかなるかも知れな
いが、志ん生師匠は、2人と出ない芸だと想ったものです。真に、持って生まれた才能と努力、それに、
その時代を生きた環境の総合芸です。

根多数も多く“新版三十石”の様に、昔の嘶の掘りおこしに力を入れたり“火焰太鼓”“お直し”“黄金餅”
“唐茄子屋政談”は他の進髓を許さないほどです。昭和36年12月15日、読売巨人軍の忘年会で倒れ、その
3ヶ月後に退院、見事に復活した時には本当に嬉しかったです。

文楽、志ん生、同じ時代に2人が揃った事は、その後の落語界に大きな影響を与えたと思います。ご冥
福をお祈りします。

六代目 三遊亭圓生 (本名 山崎松尾) 明治33年9月3日生
明治38年10月頃から、豊竹豆飯名太夫(子供義太夫) - 明治42年6
~7月頃に四代目圓蔵門人 橘家圓童 - 大正4年 小圓蔵 - 大正9
年3月真打 橘家圓好 - 大正11年2月四代目 三遊亭圓窓 - 大正14
年1月六代目 橘家圓蔵 - 昭和16年5月六代目 三遊亭圓生襲名
(テヘへの圓生、柏木の師匠) 昭和54年9月3日歿(79才) 法名(戒
名)松寿院圓生日栄居士

芸は、研ぎ澄まされた様式美、形式美、指の一本一本にまで意識
を込めた演技、とにかく仕草の美しさには定評が在り“怪談牡丹燈
籠おみね殺し”の中に、関口屋伴蔵が女房のおみねに浮気を問い詰
められて開き直り「エイうるせいやイ、^{しけん}四間間口の^{おもてだ}表店を張ってる
荒物屋の旦那だ・・・」の台詞と共に扇子をバツと開いて自分の胸元を煽ぐ仕草は、観ていてゾッとす



五代目 古今亭 志ん生
出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>



六代目 三遊亭 圓生
出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>

ほどでした。圓生師匠は寄席育ちで、学校へは通っていませんので、ほぼ一日楽屋で過していましたから、根多数の多いのは有名で「圓生百席」なるレコードを出したほどです。“能狂言”“九段目”など、今は滅多に聴かれない噺も数多く持ってました。昭和48年3月には、皇后陛下の古稀の祝いに御前口演で“御神酒徳利”を演じたのは有名で、又、昭和54年3月には、噺家で初めて歌舞伎座の独演会を開くなど、大活躍でしたが、昭和53年6月に真打乱造に反対して、落語協会を脱退し、一門を率いて落語三遊協会を結成、その後体は忙しく、昭和54年9月3日の誕生日、習志野市サンペデックホールで“桜鯛”口演後、急に体を崩し、そのまま心筋梗塞で還らぬ人となったのですが、同日にパンダランランの死の為新聞の一面を譲るといふ落ちまで付くテェのはいかにも噺家らしい最期でした。

五代目 柳家小さん(本名 小林盛夫^{もりお})大正4年1月2日生
昭和8年6月四代目小さん門人 栗之助-昭和14年3月二ツ目 小
きん-昭和22年9月真打九代目 柳家小三治-師歿後八代目文楽門
人-昭和25年秋五代目 柳家小さん襲名(目白の師匠) 平成14年
5月16日歿(87才) 法名(戒名)本行院殿法勲語咄日盛居士

三遊派、柳派の流れの中、今や柳の代表的名跡が小さんです。五代目小さんの得意噺は“かぼちゃ屋”“家見舞”“強情灸”など熊さん、八つつあんの職人噺、今では時代背景の主流、長屋は存在しませんが、小さん師匠が語り出すと、正にその場面に引き戻される様に時代空間を共有出来るほどの実力の持ち主です。私事で恐縮ですが、20年ほど前に柳噺の代表“猫の災難”を柳亭小燕枝(現 柳家さん遊)師匠に着けてもらいまして、勉強習慣として、他の人の“猫の災難”を聴いていたのですが、小さん師匠の実力の凄さに圧倒されました。又“笠碁”“粗忽の使者”“馬の田楽”の様に、登場人物の滑稽さは群を抜いています。外にも“うどん屋”“ちりとてちん”“禁酒番屋”の様に仕草も驚ろかされます。「狸を演るには、狸の了見になれ」という名言が残ってますが、一人ひとりの登場人物を克明に演じ分け、お客様に媚びず、笑いの王道を真直ぐに遊んだ柳家小さん、晩年には孫弟子を入れると100人を超す大所帯を率いて、落語界初の人間国宝に選ばれ、現在に多大な影響を与えた功績は大きく、懐の広い大人物で在りました。只、惜しいかな、平成14年5月に多くの人に見守られて他界致しました。真に「巨星墜つ！」の感です。



柳家 小さん

出典：<https://hakameguri.exblog.jp/30229115/>

テな訳で、私が想う名人4人を書きましたが、これは飽くまで私個人の考えです。「昭和の名人と現在の噺家」の表題が在りますので、今を生きる噺家さんを書きたいのですが、紙面の制限も在りますので、今回はこれまでとします。新型コロナの行末はまるで解りません、皆様も十分お気を付けに成り、又、次号でお目に掛ります。

(資料提供：青柳徳次様、東京かわら版、参考資料：橘左近著「東都噺家系図」お礼を申し上げます。)